

獨協学園資料センター・ 日本赤十字看護大学看護歴史研究室

豊田雅幸

大学アーカイヴズとしての立教学院史資料センターが発足して八年。この研究紀要も第十八号を数えるまでになったが、立教の一三五年の歩みを振り返ることができ「常設展示」は、いまだ実現していない。

◇◇◇◇

今回は、その常設展示において独自の取り組みをみせている、「獨協学園資料センター」と「日本赤十字看護大学看護歴史研究室」を、暑さ厳しき折に訪問した際の印象とともに、ご紹介しよう。

カフェテリアと隣接する展示

「獨協歴史ギャラリー」。獨協大学創立四〇周年にあたって計画され、二〇〇七年三月に竣工した「天野貞祐記念館」の一階に位置する、獨協学園の常設展示場である。この記念館は、学内最大であるとともに、「図書館を中心とする総合学術情報機能と教室機能を融合した」「知の創造拠点」とされる場所でもあり、まさに常設展

示にふさわしい施設といえる。

ギャラリーは、【図1】からもわかるように、建物のエントランスホールに面しており、反対側の入り口とあわせ、アクセスしやすい立地となっている。また、ギャラリーの側面がカフェテリアと隣接しており、展示物の一部がカフェテリア側からも覗けるといって、非常にユニークなつくりになっている。ひょっとしたら、お茶をしている学生も、興味を持って見学に来るのではないだろうか？

さて、肝心の展示は、基本的に六つのコーナーから構成されている。【図2】に見るように、展示スペースは決して広いというわけではないが、それぞれのコーナーが効果的に配置されている。

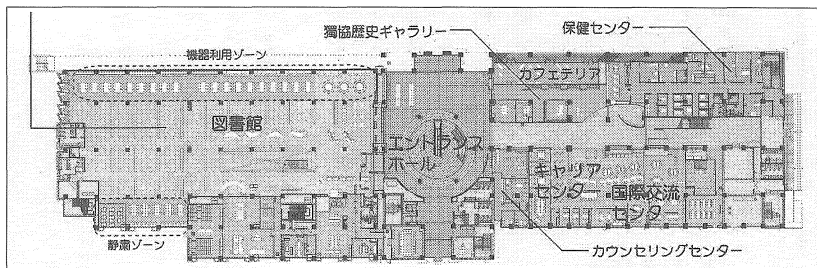
各コーナーの配置と展示内容は、同ギャラリーのパンフレットの記述から拝借すると、次のようになる。

A. 獨協学園ショーケース

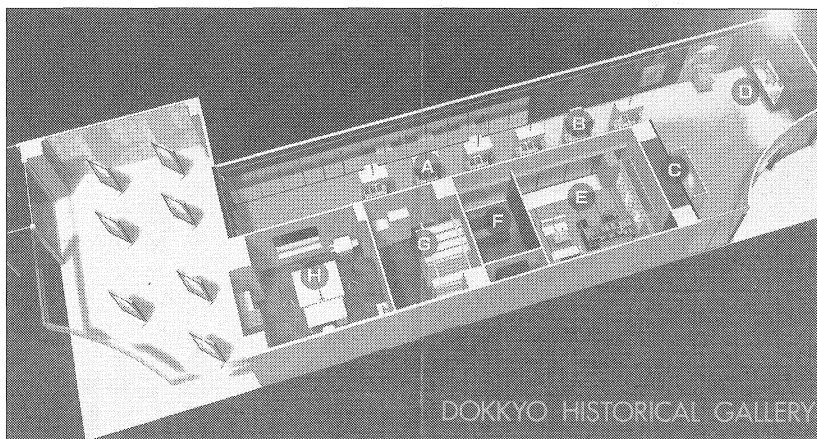
ケースの中には歴史資料が展示され、その背面には学園の沿革がクロニクルで表されています。学園年表の傍らには、関連する一般年表が付き、近代史のなかで獨協学園が理解されるようになっていきます。

B. 卒業生アルバム【写真1】

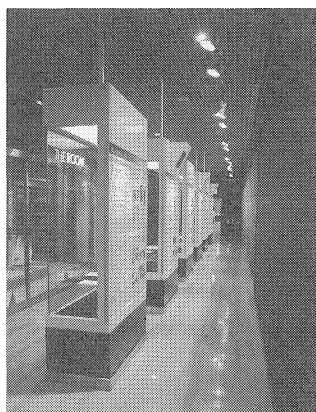
獨協が生んだ著名人とその業績を動画で紹介します。木下李太郎（詩人・劇作家・評論家・医学者）や水原秋



【図1】「獨協大学『天野貞祐記念館』建築概要」より



【図2】「獨協歴史ギャラリー」パンフレットより



【写真1】ギャラリーの背面を利用したコーナー。上部にディスプレイがあり、右手のカフェテリアからも見える

櫻子（俳人・医学者）など、わが国の近代文化史を飾る多くの学者・文化人が生き生きと画面に登場します。

C. 歴代校長／学長プロフィール

獨逸学協会学校から今日の獨協中学高等学校にいたる歴代校長、ならびに獨協大学、獨協医科大学、姫路獨協大学、獨協埼玉中学高等学校の歴代学長・校長の就任年次その他のデータが見られます。

D. 天野貞祐・関凌コーナー

戦後の荒廃から獨協を立ち直らせたのは天野です。そしてこの学園を大きく発展させたのが関でした。このコーナーでは天野の教育行政・

学術研究などと、関の生い立ち・学園への思いが資料を通して明らかにされます。

E. 天野貞祐・思索の現場（写真2）

天野は近代世界の（理性）を、不幸な軍国の時代にあっては、敢然と掲げ続けた数少ない知識人の一人です。ここは復元した書斎です。粗末な書



【写真2】復元された書斎

架や調度が醸す質素な空気からは、天野の思想の清廉さが感じ取れます。

F. 獨協学園・創生と原点

獨協の歴史が映像を通して描かれています。明治初めの獨逸学協会創設から今日の獨協学園に至るまで、獨協の軌跡が物や風景、人物の画像を織り交せて通観できます。

これらの展示を見学しての率直な印象は、非常に洗練されている、というものであった。もちろん、出来て間もないということもあるが、照明や壁の色彩といった、つくり全体がそうした雰囲気醸しだしているのかもしれない。そして、六つの展示コーナーのうち、三つ（B・C・F）にディスプレイ等のAV機器が備えられていることも、さらにそうした印象を強めることに一役をかつている。

また、圧巻であったのは、「天野貞祐」の書斎が復元されているコーナー（E）である。大型の博物館や記念館などにおいてはしばしば見受けられるが、細長いギャラリーの限られたスペースにおいては、尚のことその存在感が際立っている。

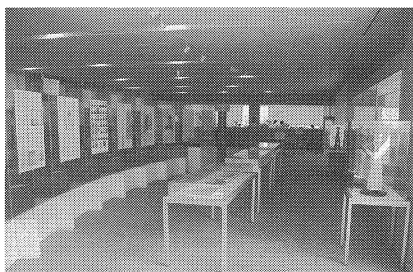
コンパクトながら、洗練さと完成度の高さを感じずにはいられない展示であった。

学生動線に位置する展示

各国大使館も点在する、緑に囲まれた閑静な住宅街の広尾。日本赤十字看護大学の常設展示は、この広尾キャンパスの一角、一号棟一階に位置している。

立教のある池袋とは全く異なる景観に驚きつつキャンパスに到着すると、常設展示の場所にも、またびつくりさせられた。建物の入り口からすぐの事務スペースの目の前に、展示エリアが設けられているのである。周囲には掲示板などもあり、学生が頻繁に行き来する、いわば、学生の動線上にうまく設けられた展示となっている。加えて言えば、職員や来客に対しても、アピール力のある場所ではないだろうか【写真3】。

展示内容は、常設展示と特別展・企画展の組み合わせとなっている。常設展示のテーマは、「日本赤十字社の看護教育の歴史」明治



【写真3】左手が常設展示で、右手が特別展示。奥には事務のカウンターが見える

から大正、昭和、そして平成へ」というもので、「ユニフォームの変遷」などの興味深いトピックを織り込みつつ、看護教育の歴史が振り返れるようになっていく。

一方、見学した際には、特別展として「明治二三年トルコ軍艦エルトゥール号遭難事故と日本赤十字社の救護活動」が開催されていた。こちらの展示は、常設展示とは違って、スタッフの方々の手作りによる展示とのことであった【写真4】。

また、展示コーナーの一角には、「ナイチンゲール記章」「災害時の救護」「看護の学び舎」という三つの番組が見られる映像ブースも設置されている【写真5】。展示のスケールとしては小規模であり、つくりも華美ではなく落ち着いた感じのものであった。しかし、次に示すように、特別展や企画展を定期的で開催しており、その取り組みへの強い熱意を感じるものでもあった。



【写真4】特別展のひとつ



【写真5】映像ブース

〔特別展〕

○新校舎竣工記念特別展示「看護の学び舎〜日本赤十字社病院・養成所の変遷〜」（二〇〇六年三月〜）

○第四一回ナイチンゲール記章受章記念特別展示「本学のフローレンス・ナイチンゲール記章に輝く人々たち」（二〇〇七年五月〜）

〔企画展〕

○「大学周辺歴史探検」（二〇〇七年三月〜）

○「一八九一（明治二四）年濃尾地震における日本赤十字社の災害救護」（二〇〇七年九月〜）

そして特筆すべきは、このような展示が、大学アーカイヴズとしての組織・体制づくりにより、ある意味先行して

実施されている、ということである。

同大における所蔵資料の保存と利用へ向けた取り組みは、「看護歴史研究室」によって担われているが、その発足は、展示施設のある新校舎の建設（二〇〇五年）を契機としている。その後、所蔵資料の概要調査、データベース化などにも取り組んでいるとのことだが、組織・体制の整備は、まだまだこれからの課題だという。そうした状況にもかかわらず、短い期間にこれだけの展示を実現しているのだから、正直なところ、驚きの一言である。

◇◇◇

今回訪問した二校の展示は、決して大規模というものではないが、それぞれ独自の取り組みを見せており、常設展示を懸案としている立教にとっては、非常に刺激的で、かつ、参考となる実践事例であった。

また、いずれの展示も、新校舎の建設が一つの契機となつて実現しており、新たな施設の建設計画が複数進行している立教においても、是非実現したいものである。

▽獨協学園資料センター

<http://www.dac.ac.jp/gallery/index.html#s>

▽日本赤十字看護大学看護歴史研究室

<http://www.redcross-history.org/index.html>

〔付記〕見学に際して、獨協学園資料センターの新井孝重所長はじめスタッフのみなさん、日本赤十字看護大学の川嶋みどり先生と川原由佳里先生には、お忙しい中、大変お世話になりました。記して感謝の意を表したいと思いません。